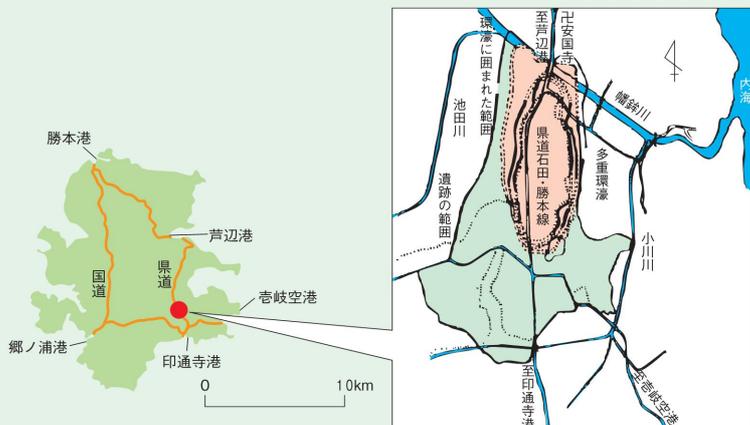


MEMO



3 弥生人のくらし

(1) 大環濠集落



原の辻遺跡の位置（岩手県）

岩手県芦辺町と石田町にまたがる深江田原という平野に、原の辻遺跡がある。

この遺跡は大正時代から発掘調査がおこなわれ、金属器や石器、土器、骨角器など数々の貴重な遺物が出土している。

1993（平成5）年に始まった本格的な発掘により、吉野ヶ里遺跡（佐賀県）をこえるほどの大きな環濠が発見され、全国的に知られるようになった。

原の辻遺跡は、南北750m、東西350mの楕円形の台地を囲むように三重の濠をめぐるした弥生時代前期末から後期（2100～1700年前ごろ）にかけての環濠集落であることがわかった。

原の辻遺跡は、「魏志」倭人伝に書かれた一支国の中心（王都）と考えられ、「魏志」倭人伝に登場する30余りの国々のなかで、名前がはっきりした国が初めて姿を現したのである。

(2) 原の辻の弥生人のくらし

「魏志」倭人伝には、一支国について次のような意味のことが書かれている。「役人を卑狗や卑奴母離という。広さは3百里平方ばかりある。竹や樹木の林が多く、3千ばかりの家がある。やや耕地もあって、田を耕すが、それでも食料が足りないので、ここでもまた南北に交易をしている。」一支国の3千戸は、同じく「魏志」倭人伝に書かれている対馬国の千戸よりもはるかに多く、末盧国の4千戸に近い多さであり、一支国の繁栄が想像できる。

みんなで考えてみよう!

原の辻の弥生人のくらしはどのようなものだったのだろうか？

MEMO

原の辻の弥生人はどのような暮らしをしていたのだろう。

原の辻遺跡には大きな環濠があるが、これは敵を防ぐためばかり



内濠の調査風景

(提供:長崎県)

でなく、水をたたえて農業用水としても活用していたと考えられている。また、高床倉庫の跡も確認されているが、ここには穀物を蓄えていたものと思われる。濠からは、稲作に使われたと思われる鍬、鎌、斧、石包丁などが出土している。

このように、原の辻の弥生人は非常に高い技術も持っていたようである。

10万点以上におよぶ出土品の中には、中国や朝鮮半島から持ち込まれた土器、青銅器、鉄器や装飾品が目立っている。

中国の貨幣も発見され、壱岐がこの時代から大陸と交易していたことがわかる。

弥生時代は、戦いをとおして国がまとまっていく時代であった。原の辻からは、日本最古の身を守るための木製の盾が出土している。また、戦いのために使われたと思われる矢じり(銅鏃)や鎧も出土している。

1996(平成8)年には、大陸との交易の拠点である国内最古の船着き場跡が発見され、当時の土木技術が高いこともわかった。2000(平成12)年11月には国の特別史跡に指定され、最近の環濠内の調査では、中国系や韓国系土器と共に山陰地方や近畿地方、肥後地方の土器など広域にわたる土器が含まれることがわかってきており、「一支国」の人々の活発な海上活動の軌跡を物語っている。



出土した人面石
(提供:長崎県)



たくさん出土した銅鏃

(提供:長崎県)

みんなで考えてみよう!

原の辻遺跡をさらにくわしく調べてみよう。
ホームページ巻末参照

「原の辻遺跡はどこにある？」

原の辻遺跡がある壱岐は、九州と朝鮮半島の間であり、対馬とともに古くから中国大陸や朝鮮半島と本土を結ぶ拠点として重要な役割を果たしてきた。

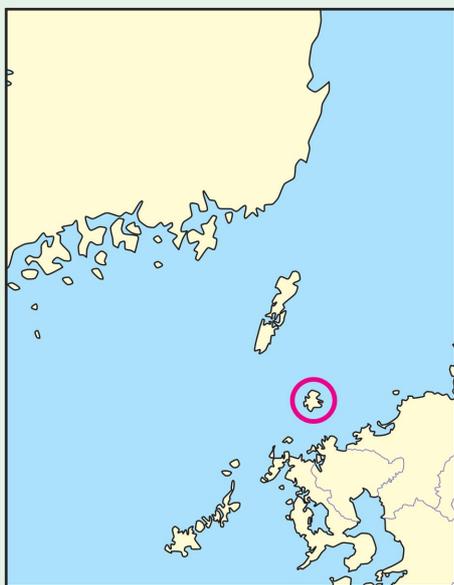
福岡県博多から船で約2時間半、高速船で約1時間、佐賀県唐津市からは船で約1時間半の距離である。

島の地形は、全体的に平坦である。標高約213mの岳ノ辻が島内の最高峰で、島の東南部には「深江田原」とよばれる長崎県第二の平野があり、原の辻遺跡はこの平野の中にある。

遺跡の中央部には低い丘があり、北側には島内最大の幡鉾川が東西に流れ、1.5km離れた内海に注いでいる。

「原の辻遺跡の履歴」

原の辻遺跡は旧石器時代から中世までの遺跡で、主体となるのは弥生時代である。今から約2300年前にこの地に住みはじめ、約2200年前には多重の環濠をもつ大集落として整備され、約1600年前の古墳時代前半まで存続していたようである。



北部九州と大陸をつなぐ壱岐の位置

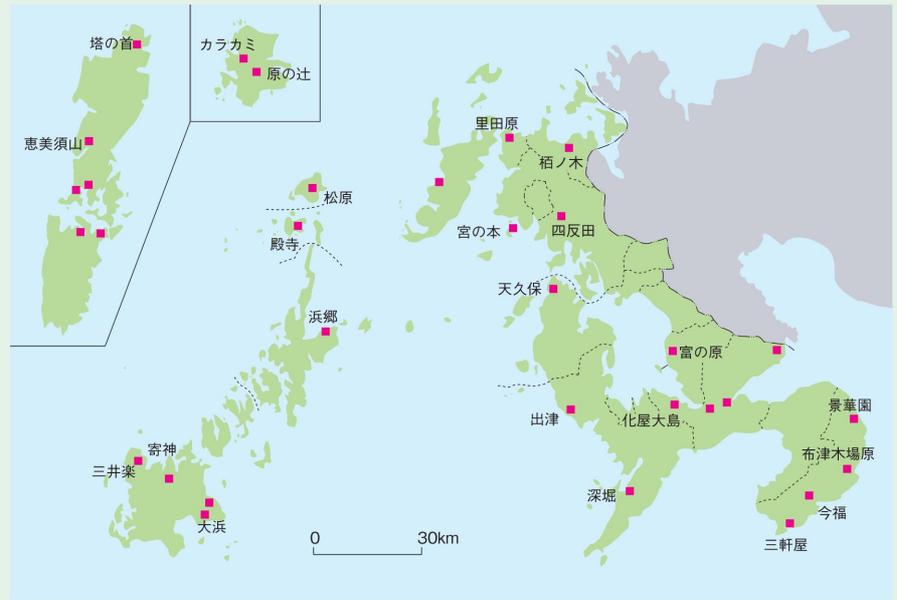
中国の歴史書「魏志」倭人伝には3世紀の壱岐のことが「一大国」(一支国の誤記)として登場している。



原の辻遺跡の全体の様子

(提供:壱岐市観光連盟)

MEMO



弥生時代の主な遺跡分布

(3) 弥生時代の長崎県

県内では、このほか注目すべき遺跡として、平戸市田平町の里田原遺跡がある。里田原は原の辻よりやや古く、縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての遺跡である。ここでは、早くから稲作が本格的におこなわれていたことがわかっている。里田原弥生人は、木工技術にたいへんすぐれ、多くの木製農具を作った。

海と山の多い長崎県では、弥生時代に農耕がおこなわれたのは、里田原や原の辻など一部に限られ、他の多くの所では、交易や漁によって暮らしを支えていたようである。

五島市岐宿町の寄神貝塚、西海市西海町の天久保貝塚、長崎市の深堀遺跡などをみると、弥生時代になっても漁が暮らしの中心で、農耕はおこなわれていなかったようである。

みんなで考えてみよう!

古墳はどのような目的でつくられたのだろうか?



4 古墳の時代

(1) 鬼の窟

壱岐には「松尾鬼の岩屋」とか「鋸鬼屋」「鬼の窟」と呼ばれるものがある。これらは、たたみ1枚ほどの広さで、厚さが1mもある大きな石を積み重ねて横穴式石室を造り、その上に土を盛り上げた円墳である。

このような古墳は、豪族などの身分の高い人がほうむられた墓で、壱岐の中央部を中心に250基余りも見つかっている。県全体で



鬼の窟古墳

(提供: 壱岐市観光連盟)

500基余りの古墳があるといわれており、壱岐にいかに多くの古墳があるかがわかる。一般に古墳が造られるのは、3世紀から7世紀であるが、壱岐では、ほとんどが6世紀から7世紀前半にかけて造られている。この時代、壱岐には身分の高い豪族が多くいたことが考えられる。

(2) 古墳時代の壱岐

壱岐に古墳が多く造られた6、7世紀は、わが国と朝鮮半島の往来が盛んな時代であった。大和政権が朝鮮半島の百済と手を結んで兵を送ったのもこの時代である。このころ朝鮮からは、仏教がもたらされたり、農業技術が伝えられたりしている。

壱岐は、大陸との中間に位置することから、兵士や使節あるいは渡来人が行き来するときの重要な中継点になっていた。大化の改新以前、大和政権は、国造や県主という地方官をおいた。国造となるほどの有力な豪族には、直の姓が与えられた。壱岐でも「壱岐直」とされた豪族がいたことが知られている。この壱岐直の屋敷が島の中央部にあつて、その跡が後に国分寺（島分寺）になったといわれている。現在、国分寺跡のすぐ近くにある鬼の窟古墳は、この壱岐直の墓であろうともいわれているが、それを証明するものは何も残されてはいない。

(3) 古墳時代の長崎県

大村湾に面している東彼杵郡東彼杵町の彼杵の古墳（ひさご塚古墳）は、前方後円墳で全長58.8m、高さ6.3mで、県内でも大きな古

MEMO

MEMO



古墳時代の主な遺跡分布

墳である。そのほか大村湾沿岸部には、大村市のくしまざき玖島崎古墳群、西彼杵郡とぎつ時津町まえしまの前島古墳群がある。

有明海沿岸部には、諫早市ありあけかい小長井町こながいの長戸鬼塚古墳、雲仙市ながと おにつか国見町くにみの高下古墳、橘湾沿岸部には長崎市のまがりざき曲崎古墳群などがある。

そのほか、古墳は対馬市、平戸市たくしま度島、北松浦郡おぢか小値賀町にもある。

体験 コーナー

縄文人のくらしを体験しよう

レベル1 火をおこしてみよう。

レベル2 土器を作ってみよう。

レベル3 竪穴住居を作ってみよう。

レベル4 当時の料理を作ってみよう。

※注意すべき点

火をおこす場合は、先生の指示に従っておこなうことが大切です。

